藤屋 侃士
（下松市幸ケ丘）

トラウマの子供たち（中）
～パレスチナ巡礼⑬～

心的外傷・トラウマを抱える子供たちの施設、ホリー・チャイルド・プログラム（HCP）はエルサレムの隣りの街、ベツレヘムにある。

イスラエルが首都と主張するエルサレムとパレスチナ自治区のベツレヘムとの間には高さ八㍍もある分離壁ができ、以前は十分余りで行けたのに、タクシーで三十分もかかる。近くに行くと牢屋に入れられているような感じを受ける。

イエスの生誕地であるベツレヘムには「生誕教会」があり、付近には多くの人が住んでいるが、HCPはそこから少し離れた静かな住宅街にある。HCPは自治政府も認める学校であり、トラウマの障害が良くなれば普通の学校に編入できる。

建物は二階建てで、外観は普通の民家に見える。ここに五歳から十歳までの約三十人が心理カウンセラーなど十人のスタッフの指導を受け、三年間で地域の学校への復帰を目指す。

支援を始めてしばらくして、現地のシスターから子供たちが描いた絵が送られて来た。絵は子供の心理状態がよく表れると言われ、紛争下の子供たちの状況を少しでも理解してもらおうとバザーの会場などに展示している。

専門的なことはわからないが、紛争下に限らず、複雑な現代社会の中で、外見は普通に見えても、心理ケアを必要とする子供が増えている。

イスラエルとの直接の衝突は減少したが、今もイスラエルの占領下にあり、失業率も高い。イスラエルとパレスチナ自治区の間の分離壁に象徴されるように敵対し、子供がトラウマを抱える状況に陥り易い状況にあることは素人でもわかる。

紛争が長期化し、トラウマの根源を取り除くことのできないパレスチナでのトラウマ対策は大変だろうと実感する。わずか半日の滞在では何も理解できていないことを承知の上で、施設で感じたことを紹介する。

紛争下のトラウマだからと大上段に構えることなく、地味で地道に基本的心理ケアに取り組んでいる。日本のトラウマに関係ない子供にも大切なことを教えているように思える。

○基本的には

①安心と思える環境を提供。

②パレスチナの文化を好きになるように配慮する。

③さまざまな宗教にふれ、祈りや音楽で心の落ち着きを取り戻させる。

○具体的な学校でのルール

①静かにする②先生に目を向ける③先生の話に耳を傾ける④手をあげる。それ以外の時は手をひざに置く⑤走り回らない⑥一生懸命に作業するの六つ。

当然のことばかりだが、これらを通じ、感情を落ち着かせることで、徐々にトラウマを取り除いている。

子供たちが自分の国を好きになる一環として、全員、パレスチナ刺繍（ししゅう）のチョッキを着ている。ふと、日本の学校で、子供たちが日本の文化を好きになるように配慮した授業がされているのだろうかと思った。何よりも一人々々の子供と真摯（し）に向き合っている施設のあり方に共感を覚えた。

（写真）左上：送られてきた絵の展示会　右下：自国を好きになるよう工夫された制服